

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	Covid-19 のパンデミックにおける看護系大学生の卒業時における看護技術の到達レベル —単施設後向き観察研究—				
研究組織	代 表 者	所属・職名	看護学部・講師	氏名	野津 美香子
	研究分担者	所属・職名	順天堂大学保健看護学部 母性看護学・教授	氏名	西岡 笑子
		所属・職名	順天堂大学保健看護学部 公衆衛生看護学・教授	氏名	酒井 太一
		所属・職名	順天堂大学保健看護学部 基礎看護学・前任准教授	氏名	高桑 優子
	発 表 者	所属・職名	看護学部・講師	氏名	野津 美香子

講演題目
コロナ禍における看護大学生の卒業時における看護技術の主観的な到達レベル —単施設後ろ向き観察研究—
研究の目的、成果及び今後の展望 【目的】コロナ禍における看護大学生が卒業時までに経験した看護技術の主観的な到達レベルの実態を明らかにし、目標に到達することが容易、または困難な看護技術を特定すること。 【倫理的配慮】本研究は A 大学の研究等倫理審査の承認を受け、規定のオプトアウトの手続きを踏み実施した(承認番号：5-07 号)。 【結果】363 名の学生から回答を得た(回収率 100%)。141 項目のうち 64 項目(45.4%)が到達良好技術であった。20 項目(14.2%)は到達困難技術であった。10 項目以上の技術項目を含むサブカテゴリーの中で排泄援助技術、活動休息援助技術、呼吸循環を整える技術の到達良好技術の割合は 40% 未満であった。環境調整技術は 3 年間を通じて目標到達割合が高値であった。到達レベル毎に到達困難技術を比較するとレベル I が 8 項目(23.5%)、レベル II が 11 項目(20.4%)でありレベルが高いほど到達困難であった。モデル人形を使用する 15 項目の看護技術では到達良好技術は 0 項目(0%)であり、14 項目(93.3%)が到達中等度技術であった。 【考察・結論】 我々は以前、コロナ禍前の 2017 年から 2019 年における看護大学生の卒業時における看護技術の主観的な到達レベルを報告した。その結果と本研究を比較すると、コロナ禍前では、到達良好技術が 81 項目(57.4%)であったのに対し、コロナ禍では 64 項目(45.4%)に低下した。また、到達困難技術はコロナ禍前の 5 項目(3.6%)から、コロナ禍では 20 項目(14.2%)と増加した。コロナによる臨地実習の制限や学内実習への変更といった学習環境が目標レベルまでの到達を阻害した可能性がある。特に、活動・休息援助技術や清潔・衣生活援助技術、目標レベル I の看護技術に関してはコロナ禍前と比較して目標到達度が大きく低下した。これは、実習時間や実践の機会の制限が、看護学生の到達レベルの自己評価に影響を及ぼしたと考える。コロナ等により看護基礎教育の段階で実習や看護技術実践の機会を失うことを余儀なくされた看護学生には、卒業後の手厚い支援が必要不可欠である。